

『金閣寺』における「循環的な構造」¹ —「行為」の動因を中心に—

高 好眞

‘Cyclic structure’ in “The temple of the Golden Pavilion” A study focusing on the motives for ‘action’

Hogin Ko

Abstract

‘Cyclic structure’ can be seen in “The temple of the Golden Pavilion” by Yukio Mishima in which ‘I’ (Mizoguchi) decides to live after committing an arson and starts writing his own memoirs. The phrase ‘I wanted to live’ has two meanings. One suggests the motivation for writing his memoirs; the second one is related to the presentiment of the future after finishing it. This interpretation is based on considering the novel’s reminiscent narrative as well as the fact that ‘I’ is both the culprit and the writer at the same time.

‘Cyclic structure’ can be also seen in Mizoguchi’s acts of rebellion when being rejected by others. That is particularly pronounced after the arson when ‘I’, who was rejected by the ‘beauty’ of Kinkaku, chose ‘life’ because he remembered Yuiko who has been a formative experience in his life. This pattern is visible in the Mizoguchi’s tendency to act as if imitating an impulse. It is also important to point out that it is the relationship with others that causes him to act in such manner.

Upon finishing writing his memoirs, he realizes the ‘educational effect’ of the arson and makes its observation his new meaning of life. This development leads to yet another ‘cyclic structure’ – that of the future unfolding.

In “The temple of the Golden Pavilion” there is also a change of theme – from jealousy towards beauty into a determination to let everyone know of the ‘educational effect’ of arson. The ending of this work is also the beginning of a new world without Kinkaku – the possibility of the future that remains unwritten. There are only a few representations of ‘America’ in this work but the arson itself and its ‘educational effect’ are suggestive of the American shadow over ‘Kinkaku’ which was left intact during the war and also the current situation of growing dependence on America. Here we can see Mishima’s awareness of the problems facing postwar Japan.



目次

はじめに

1. 手記の執筆動機—「循環的な構造」の観点から
 2. 「拒絶に対する反逆の模倣」としての「行為」—「有為子」を手がかりに
 3. 空襲の再現としての「放火」—「教育的効果」のために
 4. 重層化される主題—戦後批判をめぐって
- おわりに

はじめに

国宝の金閣は昭和25年7月2日未明焼失した。三島由紀夫は、この事件を下敷きにして『金閣寺』（『新潮』昭31・1～10）を書き上げた。放火犯人は鹿苑寺の徒弟、大谷大学生林養賢（21歳）である。7月4日の朝日新聞は、容疑者の自供する犯行動機を次のように伝えている。

金閣の美しさを求めて毎日訪れる参観者の群れを見るにつけて、私は美に対し、またその階級に対して次第に反感を強くしていった。世の中の美は自分にとって醜いと感じたが、反面その美に対するねたみを押えることが出来なかった（中略）。
（傍点引用者）

小林秀雄との対談「美のかたち—「金閣寺」をめぐって」（『文芸』昭32・1）で、三島は放火の動機は「詰らない動機らしいんですよ。」「美でなくてもいいんです。」と言及しているが、作品は「美に対するねたみ」が一つの主題をなしている。「『金閣寺』創作ノート」には、モデルの林養賢について丹念に調査した痕跡がつづられており、その中で「問題は養賢の短い単純な生涯の中に、どれだけのひろがりのある小説的構造を収めるか」²という記述に注意が払われる。「光クラブ」の学生社長山崎晃嗣をモデルとした『青の時代』（『新潮』昭25・7～12）の執筆とは違って、『金閣寺』が長い構想の時間を必要とした理由がそこにあるため

ある。

三島は「私の小説の方法」（『文章講座4』河出書房、昭29・9）で、「いい小説を書くには素材を永く温めることが必要である」と、それに続けて「小説は現実を再構成して、紙上に第二の現実を出現させなければならない」と書いている³。この当然の言説は、『金閣寺』の生成に特別な意味を付与している。『金閣寺』は、事件から約6年が過ぎ完成に至ったが、このような時間のズレは、作品に当の事件には表れてこなかった書く時点における新たな主題を込める余地を与えている。書き上げられた作品は、金閣の放火の原因を「あらゆる方面から追究する小説」（『「金閣寺」創作ノート』）となっている。

「美に対するねたみ」⁴は、三島の好みの素材であったろう。事実、作品もそこから出発しており、外界から疎外されがちな吃音者の「私」（溝口）が「金閣」という「美」の幻影に邪魔され、「人生」に参加できないことが物語の一つの焦点となっている。物語の中盤まで「美」と「人生」の狭間で揺れ動く「私」の人格が作品の大きな枠をなしているが、それ以降「私」の自意識の変化とともに主題は大きく変わり、〈外界〉にむけ放火の「教育的効果」を知らせるため、放火を実践するに至る。物語の醍醐味は、放火とともに死ぬはずだった「私」が、思いもよらないところで死から生へと反転する結末にある。

ここで「生きようと」「思つた」「私」は、手記の書き手になって手に入れた生（人生）の意味を確かめるため筆を握る、という執筆動機が考えられる。回想の形式で書かれたこの手記は、過去の出来事にもっぱら集中しており、書く現在の状況に一切触れず、さらに「生きようと私は思つた」と締め括られることによって、読者をその真相を求め再読に導くだろう。このように『金閣寺』の開かれる結末は、「放火の後の世界」、つまり「金閣の存在しない世界、に開かれ、作品の表層に現れてこない〈物語の可能性〉⁵を窺わせている。

本稿は、『金閣寺』における「循環的な構造」によって開かれる〈物語の可能性〉について考察する。『金閣寺』は、先にのべた物語の形式からなる「循環的な

構造」の他、「私」(溝口)の外界(他者)との関係において、拒絶に対する反逆という形で行われる〈行為〉に「循環的な構造」をみることができる。その際、「私」の行為の索引力となる「記憶」や「回想」、または「衝動」の働きは見逃せない。作品の中から「私」の行為の動因を明らかにし、一回限りの行為として実行した金閣放火の「教育的効果」に込められた三島の問題意識に焦点を当てて論を進めていきたい。

1. 手記の執筆動機—「循環的な構造」の観点から

『金閣寺』において手記の書き手は、この小説が一人称告白形式で書かれる点から語り手の「私」(溝口)に特定することができる。また、「私」の「美」に対する憧れや、その「美」の実体験を戦争の渦中に高めていくプロセスからすると、「私」は三島の戦争体験を分有する作者の〈分身〉として見なされる。中村光夫は、「変質者の少年にこのような立派な文章が書ける筈がない」⁶と指摘しているが、「私」は「書かざる芸術家」(「『金閣寺』創作ノート」)として設定されており、また大谷大学に在学中の「私」は、確かに哲学や文学の書物を好んで読んでいたので、手記の書き手としての可能性はあり得る。それより放火の後、「今日まで、詩はおろか、手記のやうなものさへ書いたことがない」(1章)という「私」が、なぜ手記を書こうとしたのかに注意が払われる。その答えは、放火とともに死ぬはずだった「私」の「一ト仕事を終へて一服してゐる人がよくさう思ふやうに、生きようと私は思つた」(10章)という〈告白〉と密接に関連している。

有元伸子は、「私」(溝口)を作家と見做し、その書く行為に他者との回路を求める書き手の意図を読み取っている。有元は、これまで他者に「理解されることが、存在理由だ」とした「私」が、読者に自分の理解を求め物語の内容を「充分に面白く、読者を堪能させることを第一に」して、手記を描いている点を踏まえ、「生きようと私は思つた」という一文は、「私」

の作家としての出発のマニフェストであると述べている⁷。この手記をいつ、どこで書いたのかは明確ではないが、事件の後「私」がこの手記を書くという設定からすると、「書かざる芸術家」である「私」に作家としての人生への再出発が見込まれる。

稲田大貴は、「放火という行為は、溝口の内界と外界とつなげたのだろうか」という疑問を立てて、「金閣放火という行為それ自体は、溝口の内界と外界との扉を開きはしなかった。金閣放火が導いたのは、了解不可能の「他者」と化した「自己」である」とし、手記を書くことは「他者化した自己を理解しようとする行為」であって、書くことによって初めて「内界と外界を繋ぐことが可能に」なり、「「他者」なる自己を超え、他者への回路が開かれる」と述べている⁸。書くことによって他者との回路を求める、という点において有元と同じ立場であるが、稲田は「徒爾」である行為をなした〈自己への理解〉を求める動機に重点をおいている。

「私」が手記を書く行為は、これらの先行研究において、他者に自身が行った行為の理解を求めるといった意味づけが与えられており、有元は溝口を作家に位置づけている。しかし、この手記は、書き手の「私」が必ずしも他者なる読者を想定し書かれたとは言い切れないだろう。『金閣寺』は芸術家小説として眺められる要件を一部備えているが、溝口の芸術家としての輪郭はそれほど明確ではない。『仮面の告白』(河出書房、昭24・7)の「私」が同性愛者としての自画像を作り上げ、異性愛者からの失恋を正当化していくという点に、告白小説にありがちな自己弁明の趣があるのに対し、『金閣寺』はそのような気配は乏しく、書き手の関心はどのようにして放火に至ったのか、またその行為の意味に集中している。物語の最後に来る「生きようと私は思つた」という一文は、有元のいう通り、「私」の作家宣言として読めない訳ではないが、手記を書く動機を与えたある出来事による決断でもあるのである。

火を放ち、なすべき全てのことを成し得た時点で「私」は、金閣とともに滅びるはずだったが、思いも

よらない出来事によって生の方に背中を押される。「究境頂」の中で死のうとした「私」が、そこから身を引き返したのは、本文を読む限り「究境頂」に「拒まれてゐる」という「確実な意識」に触発されたからであるが、書き手はその出来事にこれ以上触れていない。この拒絶の感覚は、後にのべるが「私」の今までの人生において、「私」を〈行為〉に導く動因である。書き手の「私」は、この謎めいた死から生への反転を自分に納得させるため、幼年から青年に至る自分を振り返ってみている。その意味で手記を書く動機は、稲田のいう「他者化した自己」への理解を求めるという点に、説得力があるように思われる。手記の内容が執筆時の現在の状況と放火の後の状況に一切触れることなく、過去にもっぱら集中している理由も、自分の身の上の出来事の解明に努めているからであろう。そのため、手記の書き手の「私」は、必ずしも作家である必要はないだろう。

「私」が手記の書き手であるため想定されがちな内包された〈読者〉の存在より、作品の中で「私」の自意識の変化に影響を与えている〈他者〉との関係の比重がより大きい。物語の中で「私」は絶えず外界に出ようとしており、他者なる周囲の人間関係（特に有為子、柏木、鶴川、老師）の中で自意識の変化が行われていく。手記を書いている「私」を作家として捉えたと他者なる周囲の人間関係から変わっていく「私」の人格は弱くなるだろう。また、放火を実践する「私」の對他者意識は、物語の後半に至って周囲の人間関係を超え匿名の大衆に向けられており、放火の動機も「心象の金閣」に対する恨みから、放火の「教育的効果」の発信という啓蒙的な性格に変っている。この物語の空間で「私」が抱えている他者との関係はこのように明確な相を持っているのである。

総じて、「生きようと私は思つた」という一文は、この手記の執筆動機を考える上で、二つの可能性が示唆される。第一に、放火の後溝口に与えられた生（人生）の意味を確かめるため筆を握るという可能性である。第二に、手記を書き終わった時点、つまり「生きようと私は思つた」と、この手記を締めくくる時点で

分かってきたはずの生（人生）の意味である。第二の可能性は一読の後、溝口の放火に至る過程を十分理解した一般読者を、書き手には分かってきたはずの生（人生）の意味を求め、手記の再読に導くことが予測される。

田中美代子は、『金閣寺』の特色の第一は、犯人の一人称告白体でつづられることによって「主人公は行為者と記述者を兼ね、この物語の結句が両者の交替を示し、一種の永劫回帰的な構造をもつことになる。」¹⁰という。この「循環的な構造」について、田中は次のように述べている。

さらにこの小説の構造の要は末尾の結語、「一ト仕事を終へて一服してゐる人がよくさう思ふやうに、生きようと私は思つた」である。この言葉を最後に語り手は沈黙する。ところが、すでに「行為者」としての使命を終った「私」が、これから「生きようと」は、一体何のためにか？というまでもなくそれは行為の意味を語るためにほかならず、彼は「語り手」として再生し、ふたたび冒頭にもどって、この物語が語られはじめる筈なのである。つまり一回限りの「行為」は「語る」ことによって、幾度でも繰り返し、甦えることができる、という循環的な構造をもつにいたるのである¹¹。（傍点引用者）

上の引用によると「循環的な構造」は、記述者が一回限りの行為を語ることによって、「幾度でも繰り返し、甦える」物語の構造の意である。この作品に明瞭に見取られる「循環的な構造」は、先に述べた最後の一文が孕む二つの可能性に当てはめられるだろう。繰り返していうと最後の一文は、執筆動機であるとともに、手記を書き終わった時点で〈未来〉に開かれる意味合いを共に孕んでいるのである。

『金閣寺』についてしばしば言われる自閉的なイメージは、「心象の金閣」をめぐる「私」の想像力の過剰さと、狂気じみた行為に窺われるが、このようなイメージは記述の問題からも窺われる。『金閣寺』は「金閣」

という「美」の観念に束縛された「私」が、「心象の金閣」の実生活に及ぼす力を超克するという次元を超えて、外界にむけて放火の「教育的効果」を知らせるという啓蒙的な目的に辿り着く過程が、回想の形式で進んでいく。出奔先で閃かされた放火の「教育的効果」という着想は、第8章で書かれており、それ以降の物語の展開は放火の長い準備を経て、終章で放火を実行する寸前に行為をためらう「私」の姿が描かれている。「私」は放火を決心してから、「心象の金閣」が自分の人生に及ぼす威力を制御することができたものの、放火の寸前に「金閣」の「美」は相変わらず「私」に現れ、「かつて何度ともなく私を襲った無力感で私を縛らうと」（10章）しているのである。ここに出奔先で決心した放火の明確な目的は言及されておらず、すでに溝口のなかで解決済みの「美」の問題が現れてき、再び原点に戻ってきたかのような印象を与えている。このような行為の動機と行為の実践の間に横たわるズレは、第3節で詳細に考察する。

しかし、『金閣寺』は放火という行為をテコにして、物語の大きな反転が遂げられている。一服しながら冷静になった「私」が、「究境頂」に〈拒まれた〉ということの意味に立ち返るのは容易に推測できる。手記を書く行為は、前にのべたように、自分の身の上に起きたこの出来事の真相を求めるがゆえのことである。「私」は手記を書いていくうちに、あれ程確信に満ちて実行しようとした放火の目的を再認識するだろう。ここで生（人生）に立ち帰った「私」の生きる一つの意義として、金閣放火の「教育的効果」を確かめることが浮かび上がる。その時、維新以前の火を管理していなかった時代に発生した、無数の原因不明の放火とは違って、金閣放火の動機は公に明らかになるだろう。作品の中でこの手記をいつ、どこで書いたという情報は見当たらないが、「私」が「生きよう」と「思った」理由を自分に納得させるため書き始められた手記は、書き終わった時点でこのように金閣放火の後の世界に開かれる。それこそ書き手に分かってきたはずの作品の中から確実に予測できる、「私」の生（人生）の意味であろう。『金閣寺』において物語の「循環的な構

造」によって蘇えられる「私」の生（人生）の意味は、このように〈未来〉に開かれる結末によって改められ、この物語の自立性を一層高めているのである。

2. 「拒絶に対する反逆の模倣」としての「行為」 — 「有為子」を手がかりに

『金閣寺』がはらむ「循環的な構造」は幾つかの相を持っている。第1節では「生きよう」と「思った」放火犯人が、書き手になって手記を書きはじめるといふ物語の形式に「循環的な構造」を読み取り、そこから考えられる手記の執筆動機を考察した。手記の書き手は、放火の際に死ぬはずだった自分が生に立ち帰るこのできごとを自分に納得させるため、放火に至る経緯を振り返ってみている。手記を書き終わった時点で最終的に辿りついた放火の「教育的効果」に立ち帰った「私」は、それを見届けることに生きる新たな〈使命〉を発見するという点に、この物語の〈未来〉に開かれるもう一つの「循環的な構造」を見ることができよう。

『金閣寺』における「循環的な構造」は物語の形式の他、溝口の〈拒まれる〉存在としての自意識によって行為に導かれるパターンにも見られる。本節では、「私」の人生の〈原体験〉たる「有為子」が、放火の際に「私」を生（人生）に帰らせることに見られる「循環的な構造」を中心に考察する。

『金閣寺』は「美」と「人生」の狭間で揺れ動く「私」が、生（人生）を獲得していく様が、田坂昂の指摘のとおり、「象徴的手法を駆使して論理的イメージの詩（小説というより詩を感じる）」¹²といった趣を以て展開されている。作品の全体は、「美」と「人生」の闘い合いというイメージに貫かれており、その際「金閣」と「有為子」は、それぞれ「私」が抱えている疎外を浮き彫りにする対象として現れる。まず、「私」が直面している疎外の実態に触れてみる。

作品の第1章で生れ付きの吃音者である「私」は、周囲の人間関係から、また「金閣」の「美」から疎外

される存在としての輪郭が与えられている。前者は自分の「醜さ」からくるものであり、後者は父のいう『「金閣ほど美しいものは此世にない」』という言葉に触発されたものである。父の言葉は、自分の未知のところすでに「美」というものが存在するため、自分は「美から疎外されたもの」であるという認識を「私」に与えた。「私」は、この事実「不満と焦躁」を覚える一方、実物の金閣を目にするまでに想像力の中で様々な金閣の観念を作り上げていく。例えば、美しい人の顔をみて「「金閣のやうに美しい」」と形容する具合である。至るところに現れる金閣の幻影は、周囲の人間関係からくる疎外感をいやす契機でもあった。「金閣」に対する相反した感情が最も高まるのは、戦争が終わって大谷大学に在学中の「私」が女との性関係をもつ度に、金閣の幻影によって不能に落ち、絶望する場面に見ることができる。

「私」は金閣寺の徒弟生活を始めてから、「金閣への偏執を、ひとへに自分の醜さのせゐにしてゐた」(2章)ということに気付くようになるが、この一文は、自身の疎外感が「醜さ」からくるという「私」の告白として読むことができる。吃音は、明らかに「私」に疎外をもたらす生の条件であるが、『金閣寺』はその描き方において、水上勉の『金閣炎上』(新潮社、昭54・7)の放火犯人とは違って、溝口の激しく吃る様を描くことは控えられている。これについて柴田勝二は、「私」の肉体の「醜さ」を「円滑な発話による自己表出の成就という〈美〉を欠如させた「私」の存在を、可視的に比喩化したもの」としてとらえ、そこに吃音がもたらす外界との齟齬とは別個にある「巧みな主題の移行」を見ている¹³。吃音が「私」に与えられた疎外の装置であるのは確かであり、作中で吃音の表象に比重をおかないことによって、「私」の疎外の根源に「「金閣のやうに美しい」」と形容しがたい「醜さ」が全面化されるのである。

佐藤秀明は、吃りは「内界と外界とを区別した原因」というより「何か決定的な仕方で外界に働きかけることを空想させた原因」、つまり「内界から外界への出口をまさぐる逡巡の声」とした肯定的な意味を付与し

ている¹⁴。確かに、吃りは「私」に「二重類の相反した権力意志」(1章)を抱かせ、「内面世界の王者」「大芸術家になる空想」を楽しませた。さらにはこの権力意志は「私」を「選ばれた者」と考えさせ、「使命が私を待つてゐる」という予感さえ抱かせ、「ひとたび外界へ飛び込めば、すべてが容易になり、可能になるやうな幻想」を持たせたのである。しかし、有為子の出勤の自転車の前に踊り出て、硬直し何も話すことができなかった「私」は、「外界といふものとあまり無縁に暮らして来たため」だと自覚している。この場合、吃りは「行動が必要なときに、いつも私は言葉に氣をとられ」肝心な瞬間を台無しにしてしまう「一つの障碍」に過ぎない。物語の全体的な流れからすると、「私」が「外界」へ飛び込んで「人生」に参加しようとしたのは、自意識の発露による自然な出来事であって、それは溝口を取り巻く他者との関係に如実に現れている。作品の中で吃音による「私」と外界との齟齬はこれ以上現れておらず、先にのべた「私」の肉体の醜さ、つまり「美」から疎外された存在としての輪郭が物語の中心的な軸を成している。

井上隆史は溝口の「現実の生から疎外された生」は、単に女性からの拒絶、また吃音による他者との距離によるのではなく、「人が他者と共に生きることを可能にする間主観的な場、個々の事柄が相互に意味づけられる媒体となる関係性の総体としての場」から離脱している結果として眺めている¹⁵。けれども「私」の疎外の体験は「間主観的な場」に直面する度に生じた不具合の結果であるため、それが「私」の疎外された生の直接的な原因とはいえない。「間主観的な場」で直面させられる「私」の〈拒まれる〉存在としての自意識は、作品の中で「人生」を象徴する有為子(女)と「私」の関係、また「美」の象徴である金閣と「私」の関係に鮮明に現れるのである。大久保典夫は、有為子を「「美」の代理形成であり原初形態」ととし、「「有為子」と「私」の関係式は、そのまま「金閣」と「私」のそれ、そしてその必然の流れが金閣焼亡にまでつながる」と述べている¹⁶。美しい娘有為子は、美的な存在であるという点において、「美」の象徴であ

る「金閣」と重ねられるが、両者の関係は放火の必然性につながるというより、「私」に金閣の象徴する「美」からまた、女の象徴する「人生」から疎外感を抱かせる点においてつながっている。そもそも「金閣」に与えられる絶対的な「美」を有為子に与えるのは難しいだろう。

有為子は、作品の中で女の象徴する「人生」の代表に位置づけられ、「私」が「人生」から拒まれているという記憶として生き続けてきた。未明に自転車乗りで出勤する彼女の前に立ちはだかった「私」は、「何よ。へんな真似をして。吃りのくせに」と彼女に冷たくされる。後から彼女の告げ口で叔父に叱られると、「私」は有為子の死を願い、その呪いは数ヵ月の後果たされた。この出来事と後からのべる有為子と脱走兵士の射殺事件は、「私」のそれ以降の人生に様々な形で影を落としている。例えば、終戦後、金閣寺を訪れた米軍相手の娼婦について、有為子と似ていないが「女は目もくれなかつた」(3章)ということに有為子と共通していると回想している。また、「私」は南禅寺で子供を孕んだ女と出陣まえの士官との別れの儀式を目撃した際に、「たしかにあの女は、よみがへつた有為子その人だ」(2章)と思い出している。さらに、出奔から帰ってきた「私」は「死の準備」の一環として女との関係を求め、五番町に向かったことをこう回想している。「寺を出るときからこの一角に、私は有為子がなほ生きてゐて、隠れ棲んでゐるといふ空想にとらはれてゐた。空想は私を力づけた。」(9章)。このように有為子は「私」の意識の定住者になり続けてきたのである。

美しい女性に「有為子」を見てしまう「私」は、女性との性関係に現れる金閣の幻影によって「人生に達する」ことができなくなる。その挫折の経験は、まず大谷大学で友達になった柏木の下宿の娘との性関係に描かれる。「下宿の娘は遠く小さく、塵のやうに飛び去」ってしまい、「私」は不能に陥って「娘が金閣から拒まれた以上、私の人生も拒まれてゐた」と絶望する。他にも、先にのべた南禅寺で恋人と別れの儀式を行った女に再会した「私」は、彼女が掻き出して見せ

る乳房を目の前にした時に、その乳房が金閣に変貌する事態に遭遇してしまう。「無力な幸福感」が消え「「又もや私は人生から隔てられた!」」と嘆息し、ついに金閣に呪詛の言葉を漏らすのである。「無力な幸福感」という言葉が示す通りに、「私」は金閣の本質が「「丹念に構築され造形された虚無に他ならなかつた」」(6章)ということを知っている。金閣の美の本質が「虚無」であるという認識は、放火の寸前にも現れる。「私」はこの「女と人生への二度の挫折」の後も、諦めず遊郭に通うが「女と私との間、人生と私との間に金閣が立ちあらはれる」(7章)という結果に至るのである。

このように、物語のなかで繰り返される溝口の〈拒まれる〉存在としての輪郭は、「美」の象徴である「金閣」と「人生」の象徴する「有為子」(女)との関係を通じ、その具体的な相を見ることができる。ところで、「私」の人生が「心象の金閣」であれ、他人であれ〈拒まれる〉ことに反逆するかたちで営まれてきたという側面は見逃せない。例えば、自身をからかう海軍機関学校の生徒の鞆に秘かに刻みを入れ込んだこと、有為子の体を思って眠れない「私」が彼女の前に踊り出して屈辱を受けた時、彼女の死を願うことに端的に現れている。また、青年の「私」は、女との性関係を持つ度に不能に陥らせる「心象の金閣」に向かって、「「二度と私の邪魔をしに来ないように、いつかは必ずお前をわがものにしてやるぞ」」(6章)と呪うのである。このような「私」の性質から金閣に火を放った際、「究境頂」から身を引き返した「私」の反応に対し、`拒絶に対する反逆の模倣、としての「行為」と解釈することができよう。

「私」は最初から「究境頂」で死ぬつもりはなかった。突然の思いで階段を上って戸を開けようとしたが開けられない。懸命に戸を叩いたのは、「誰かが究境頂の内部からあけてくれるやうな気がした」からである。「ある瞬間、拒まれてゐるといふ確実な意識」に達して、「私」はためらわず階段を駆け下り、足をかける。「究境頂」の中で、死のうと思った溝口が生の方へ身を翻す転換に、この「拒まれてゐる」という意識が起爆剤として働いたのは興味深い。「究境頂」の戸を叩く

「私」の意識は「その金色の小部屋にさへ達すればいい…」と、相変わらず「美」を求めている。金閣の「美」の核心にあたる「究竟頂」の戸が開けられなかったことは、「私」に「美」から「拒まれてゐる」という「確かな意識」を与えただろう。その時、「私」は金閣の「美」の実体が「虚無」であるということを想起させられたに違いない。本文で「私」の変心についてこれ以上触れていないが、この場面でもこの作品の全体的なイメージをなす「美」と「人生」の闘ぎ合いをみることができよう。物語の結末は、「美」に拒まれた「私」が「人生」に帰されるという展開になっているが、そこには「私」の「人生」に向かおうとする意志的な決断を読み取るべきであろう。その決心を促した動因として、これからのべる有為子事件に「私」が読み取った「人生」の意味を置くことにする。

ここまで有為子は、「私」に女の象徴する「人生」から〈拒まれる〉存在としての自意識をもたらしした一因として捉えてきた。一方、彼女は「私」を「人生」に潜んでいる「崇高な要素」(1章)に直面させてくれた存在でもあったのである。しかし、「私」は長い間それを否定し続けてきた。近所に住んでいる美しい娘有為子は、前述の通り「私」が最初に欲望を覚えた官能の対象であった。「私」は手記の冒頭に有為子が脱走兵を庇って射殺される事件を以下のように回想している。

突然私の回想は、われわれの村で起つた悲劇的な事件に行き当たる。この事件には実際は何一つ与つてゐる筈もない私であるのに、それでもなほ、私が関与し、参加したといふ確かな感じが消えないのである。

私はその事件を通じて、一挙にあらゆるものに直面した。人生に、官能に、裏切りに、憎しみと愛に、あらゆるものに。そうしてその中にひそんでゐる崇高な要素を、私の記憶は、好んで否定し、看過した¹⁷⁾。(第1章)

「私」はこの事件を通じ、「一挙にあらゆるものに直

面した」が、この回想は当の事件のみならず、執筆時の書き手の「私」の意識によって、それ以降の様々な出来事までが投影される可能性を念頭におく必要がある。「私」がこの事件に「関与し、参加した」という意識に取られるのは、その現場に自分がいて、そこで行われた出来事を〈証人〉として見届けることしかできない境遇を物語っている。

この事件を「一人の少女が世界と対峙した劇」として捉える佐藤秀明は、以下のように述べている。

有為子は、脱走兵を匿った事件で、「私」に外界への対処の仕方を示す。黙秘することで「世界を拒」み、次に脱走兵を裏切ることで世界を「受け入れ」、今度は「世界を全的に拒みもしない」し「受け容れもしない」態度を示す。「自分の顔を、世界から拒まれた顔だと思つてゐる」「私」は、ここで有為子との明らかな差異を突きつけられる。有為子が世界との関係を、自分の意志に引き寄せて構築していたのに対し、「私」には世界(外界)との格闘が必要とされることが暗示されるのである¹⁸⁾。

吃音によって内界と外界が引き裂かれ、外界に出ることに挫折し続けてきた「私」であるが、この事件で有為子は世界との関係を自身の意志で構築できる〈行為者〉として「私」に映ったに違いない。そのことが先にのべた「私」を事件の「証人」としての意識を一層強めたと考えられる。彼女の行為は、佐藤の指摘の通り「私」に「外界への対処の仕方を示」し、これから「私」に「世界(外界)との格闘が必要とされる」ことが「暗示」され、そこから「私」もいずれ〈行為者〉になることが見込まれるのである。それは、金閣放火によって実現されるのは言うまでもない。

このような文脈から「私」が事件から読み取った「崇高な要素」とは、有為子の選択に暗示される〈主体的な行為者〉という意味として読み取るとうことができよう。「私」がそれを「好んで否定し看過した」のは、金閣寺で徒弟生活を始めてから芽生えてくる

〈悪の可能性〉に好んで身を委ねていったからであろう。ところで、「私」は放火を実践することによって行為者になったが、放火の際に起きた「私」の死から生への反転は謎めいている。

再び「究境頂」に「拒まれてゐる」という確実な意識によって「私」が身を翻す場面に戻る。先に放火の際に「私」が「人生」を選択する動因として、有為子事件を思い出す可能性について述べた。本文では書かれていないこの展開は、この物語の回想の形式にその可能性を窺うことができる。『金閣寺』は、物語の記述において回想や追憶の機能をよく活かした作品である。そこには行為者と書き手が同じであるため可能な語りの一つの特徴が窺われる。本文では「突然蘇った記憶」の意味作用について以下のような解説がされている。

…さて私は今まで永々と、幼時からの記憶の無力について述べて来たやうなものだが、突然蘇った記憶が起死回生の力をもたらしこともあるといふことを言はねばならぬ。過去はわれわれを過去のはうへ引きずるばかりではない。過去の記憶の処々には、数こそ少ないが、強い鋼の発条があつて、それに現在のわれわれが触れると、発条はたちまち伸びてわれわれを未来のはうへ弾き返すのである¹⁹。(傍点引用者、第10章)

放火の寸前に襲いかかった無気力から「私」を救ったのは「『裏に向ひ外に向つて逢着せば便ち殺せ』」という臨済録示衆章の一節であった。この言葉を思い出したのは、手記の書き手によって「過去の記憶の処々には、数こそ少ないが、強い鋼の発条があつて、それに現在のわれわれが触れると、発条はたちまち伸びてわれわれを未来のはうへ弾き返す」という意味作用が与えられている。出奔先で放火の決心に至らせた「残酷な想念」がそうであるように、「突然」の「回想」や、「突然蘇った記憶」は、この物語の展開において決定的なきっかけをなす場合が少なくない。

「強い鋼の発条」を持った過去の記憶とは、「私」に

とって「有為子」に対する記憶にも当てはめられるだろう。前述の通り、有為子は対世界関係において「主体的な行為者」として「私」に強烈な印象を与えた。死んだ有為子が形を変え私の人生の度々に亡霊のように現れてきたのも、彼女が「私」の人生の〈原体験〉たる存在であるに他ならない。金閣の「美」の核心に当たる「究境頂」に拒まれたものの、「人生」を選択することによって「主体的な行為者」になった「私」は、いよいよ「人生」に潜んだ「崇高な要素」(1章)を手に入れることが出来たのである。「私」が「生きよう」と「思つた」のは、このような流れから成り立っており、有為子に対する〈記憶〉は「私」を死から生へ、つまり²⁰金閣の存在しない、「未来のはうへ弾き返」したのである。

以上、「私」の〈拒まれる〉存在としての自意識によって繰り返される物語の「循環的な構造」を考察した。とくに、「美」と「人生」の狭間で揺れ動く「私」が、放火の際に「美」に拒まれ「人生」を選択することを、「私」の人生の〈原体験〉たる「有為子」との関係に焦点を当てて明らかにした。「私」の死から生への反転にみられる「循環的な構造」は、²¹拒絶にたいする反逆の模倣、という形で行われた。²²放火の後の世界、つまり²³金閣の存在しない世界、は、現に「私」が手記を書いている時空間として考えられる。この状況は当然、作者三島が筆を握ってこの作品を書いている時空間と重ねられる。この時空間にあって、金閣放火の動機として最終的に辿りついた「教育的効果」が顕現されるのである。

3. 空襲の再現としての「放火」—「教育的効果」のために

実際、昭和25年7月2日に焼失した金閣は、昭和30年10月10日に落慶法要が営まれた。前に引用した小林秀雄との対談で三島は、「金ぴか」の外見に塗り替えられた金閣について「ぼくなんか見ると、いいと思うんです」という感想を述べている。焼失した金

閣は元の金閣より美しい姿に生まれ変わっており、この上で作品の執筆が行われている。ということは放火の「教育的効果」は、本文の言葉を借りると、「われわれの生存」において「保証」となるものへの人々の関心を喚起させることにあると考えられる。作品は「行為」の意味が、その対極にある「認識」とのせめぎ合う物語の構造のなかで極められている。

『金閣寺』は、三島の二元論の一形態である「認識と行為」が物語の一つの軸となって、二人の主人公が張り合う構図を孕んでいる。「認識」を代弁する柏木と「行為」を代弁する溝口のなす緊張関係は、物語の最後まで保たれてゆき、溝口が放火を実践することによって崩れる。物語はこの崩壊に向かって、もっぱら展開されてきたと言って過言ではない。この緊張関係を〈崩す〉ところに、作者の〈関与〉、つまりメッセージが込められるのは言うまでもない。この作者の〈関与〉は、作品の表面に浮かぶ放火の必然性、つまり「美にたいするねたみ」や「私」の人生を邪魔する「心象の金閣」に対する恨みが無くなったにも関わらず、あえて放火を実践する物語の展開に窺われる。

ここまで考察してきたように、『金閣寺』は様々な「循環的な構造」によって成り立っている。とくに、戦中から敗戦にかけて変化していく「私」と金閣の関係に「循環的な構造」を見ることができる。戦争中の空襲で「私」と金閣は共に滅びる境遇におかれたが、戦火を逃れた金閣は再び絶対的な「美」の権威を獲得し、金閣の「美」から疎外された「私」は「仏教的な時間の復活」(3章)に過ぎない戦後に失望する。この部分は、まさに三島の戦争体験に重ねられるだろう。「仏教的な時間の復活」は、戦争の非常時に覚えられた昂揚感から脱落していく戦後の日常に対する三島の批判的な眼差しを窺わせる。そこから空襲の再現としての放火を読み取ることも可能であろう。

ところで、放火の「教育的効果」は金閣を焼くことを決心し、そこから繰り広げられる想像の産物であった。この放火の啓蒙的な動機は、以下のように記されている。

考へ進むうちに、諧謔的な気分さへ私を襲った。『金閣を焼けば』と独言した。『その教育的効果はいちじるしいものがあるだらう。そのおかげで人は、類推による不滅が何の意味ももたないことを学ぶからだ。ただ単に持続してきた、五百五十年のあひだ鏡潮池畔に立ちつづけてきたといふことが、何の保証にもならぬことを学ぶからだ。われわれの生存がその上に乗つかつてゐる自明の前提が、明日にも崩れるといふ不安を学ぶからだ』²⁰

(傍点引用者、第8章)

溝口が考える放火の「教育的効果」は、金閣が焼けたら「五百五十年」の歴史の時間が紡ぎだした金閣の存在が、「われわれの生存」のいかなる「保証」にもならないという事実を人々が学ぶということである。金閣が焼けたら父の言葉によって発せられた「美」としての「金閣」の権威は無化されるだろう。溝口は、金閣放火が「付喪神のわざはひに人々の目をひらき、このわざはひから彼らを救ふことにならう。」(8章)と思っていることから、漠然とした〈使命〉に駆られているようにみられる。昭和25年の今の「地上の不安」(8章)によって金閣が焼かれることを当然のように信じ込んでいる。それを裏付けるかのように、第9章は「六月二五日、朝鮮に動乱が勃発した。世界が確実に没落し破滅するといふ私の予感はずもことになった。急がなければならぬ。」という一文で締め括られている。

それにしても、自分の行為が「金閣の存在する世界を、金閣の存在しない世界へ押しめぐる」(8章)ことになって、そこから「世界の意味は確実に変わる」という予測を立てている。さらに「私」の展望は、京都に帰る汽車を待つあいだ目の前の対象に移り、世界の一端をこう作り上げている。『「金閣が焼けたら、こいつらの世界は変貌し、生活の金科玉条はくつがへされ、列車時刻表は混乱し、こいつらの法律は無効になる」』(8章)が、その一方「別誂への、私特製の、未聞の生がそのときはじまるだらう」と、放火がもたらす変化に期待を寄せている。

このように妄想狂を思わせる溝口の狂気じみた態度が、この作品の自閉的な性格を強める一要因ではあるが、以前とは違って想像の方向性は外界に向かって働いていることが見て取れる。出奔先で「金閣」は溝口に「美」の象徴から現実世界に働きかける〈媒介〉に、その意味が変わっている。「私」がその行為を「或る既成の哲学の影響として片付けられることを好ま」ず、自分の「独創であると信じたい」(6章)のは、自身の想像の力を以て作り上げた着想に基づき、今まで他者に左右されがちな「私」とは打って変わって、他者に〈教育的〉な意図を以て関わろうとしているためであろう。読者は放火の「教育的効果」に目を引き付けられるに違いない。

ここまでの考察で明らかになったが、「行為」に重点がおかれる着想は、前述したように『金閣寺』において物語の必然性と離れた「放火」に託されている。溝口は自身がこれから実行する放火は、「世界を変えるのは行為ではなくて認識だ」(10章)という柏木の言葉を認めた上で実施する点において、「徒爾」「乗余物」「無駄事」であるという認識を示している。「認識」による世界の変貌を認めたもののあえて放火を実行するのは、出奔先で思いついた放火の「教育的効果」のためであるはずだが、物語の運びはその通りにゆかず、書き手は出奔以来この放火の目的に一度も触れることなく、放火の寸前に「徒爾であるから、私はやるべきであつた」という逆説的な論理に従って放火を実行するのである。そこに三島の〈最期〉につながる着想を読み取ることも可能であろう。大久保典夫は、「溝口(「私」)の認識者から行動者への転身は、そのまま作家三島由紀夫の道ゆきと対応しているのだ。」²¹(傍点原文)と述べている。この指摘は、三島の晩年の行動への志向とその〈最期〉を考える上で重要であろう。それは一種の英雄的な行為であった。

さて、「徒爾」としての放火と放火の「教育的効果」という矛盾した動機は、前者については先にのべたように「英雄的な行為」という意味を付与することができる。物語の表面からは、行為を実行しないと柏木と同じ次元を生きることになるため、溝口はそこから距

離をとるべく放火を実践したということが考えられる。「私」が放火の「教育的効果」に〈意識的〉になるのは、この物語の〈未来〉に開かれる「循環的な構造」の中で手記を書く時点であるということは、第1節で考察した。本稿の注5で言及したW・イーザーの言い方をすると、放火の「教育的効果」は、虚構のテキストに孕まれる「空所」の要素に当たり、放火の後の世界にその具体的な効果が確認できる。すでに指摘したが、行為の一步手前にこの明確な放火の動機は、放火を実践させる力になれず、行為をためらう溝口の姿が浮き彫りになって、再び「認識」の領域に閉じ込められた印象を与えている。こうした行為者を志向しながらも認識者になりがちな溝口の気質は、放火を決心し五番町で童貞を破った初経験が「想像裡の歓喜に比べて」貧しかったので、それを「想像上の歓喜に近づける必要」に応じて、再度試してみる挿話に読み取ることができる。また、ある大学生を直感的に「『彼は放火者にちがいない』」(8章)と判断した「私」は、彼をつけながら放火行為を、「私が二重になり、私の分身があらかじめ私の行為を模倣し、いざ私が決行するときには見えない私自身の姿を、ありありと見せてくれる」(8章)と、自分の「分身」が放火を模倣し、自身を先取りしているように想像するのである。

このようにみると、放火の動機が行為を実践させる力にならないことは、行為を実践させる別の動因を窺わせる。第2節で〈拒まれる〉存在としての自意識によって触発された「私」の行為のパターンに触れてみたが、本文を読む限り、「私」の「行為」の原動力(動因)はそれだけではない。「私」は昭和24年11月に出奔するが、その出奔は老師への嫌悪を強めるうちに、自分が金閣寺の後継者になる可能性のないことを宣告されたのが直接的なきっかけであった。

その年の十一月の私の突然の出奔は、すべてこれらのことが累積した結果であつた。

後から思ふと、突然に見えるこの出奔にも永い熟慮とためらひの時期があつたが、私はそれを出しぬけの衝動にかられてやつた行為だと考へるは

うを好む。何か私の内に根本的に衝動が欠けてゐるので、私は衝動の模倣をとりわけ好む²²。

(傍点引用者、第7章)

上記の引用に読み取られる「衝動の模倣」としての「行為」は、自分には「根本的に衝動が欠けてゐる」ため、行為の作引力となる「衝動」を求め、それを「模倣」する形で行為に至るということであろう。しかし、ここで外見的に「衝動」に駆られ行われたかのように見られる行為が、実際に何らかの出来事に支えられているという前提は見逃せない。例えば、金閣放火は出奔先でふと溝口に浮かんできた「残虐」という言葉に導かれた着想であった。「残虐」とは、内翻足の大学の友である柏木によって体験させられ身に覚えられた〈感情〉である。この言葉は、柏木が以前何度も口にした言葉であった。溝口は、柏木に初めて会った日に聞かれたこの言葉をこう思い出す。「われわれが突如として残虐になるのは、うららかな春の午後、よく刈り込まれた芝生の上に、木洩れ陽の戯れてゐるのをぼんやり眺めてゐるような、さういふ瞬間だと言つたあの言葉を」(7章)と。上記の引用に従うと、柏木からこの言葉を得られなかったら、金閣を焼くという着想も生まれなかったことになるだろう。このような行為の動因は、第2節で引用した放火の直前に無気力に襲われた「私」が「『裏に向かひ外に向つて逢着せば便ち殺せ』」という臨済録示衆の名高い一節を思い出して救われる場面にも当てはめられる²³。この「突然蘇つた記憶」は、以前柏木との間に話し合った話題でもあったのである。

結局、「想像の忠実な模倣」(9章)、あるいは「衝動の模倣」としての「行為」は、「認識」の領域にいては「行為」に出ることが難しいということを物語っている。作品の中で過去に対する「回想」や「記憶」、また「衝動」的な要素は、「私」が「認識」を断ち切り、放火を実践する動因として働いている。「徒爾であるから、私はやるべきであつた」(10章)とし行われた金閣放火は、「行為」それ自体が目的であるという意味を付与することが出来よう。

最後に、『金閣寺』以降の三島の世界における「行為」の位相について触れてみる。金閣を焼くことは、有元伸子の指摘の通り、作者自身が「行為」を体験し始めた渦中に書かれているという点から「三島にとって憧れである「行為」を作中で実験してみたこと」として読み取られる。ここで有元は、三島が語り手に「行為のあとの認識」、つまり手記を書いている現在の心境を作中に語らせなかったことを、「書き手にはわかつてゐるはずの「行為のあとの認識」が三島にはまだつかめていなかった」(傍点原文)という可能性を言及している²⁴。この時期の三島において「行為」は、確かに憧れの対象の意味が強く、晩年に強めていく行動への志向とは離れている。

ところで、『金閣寺』の執筆時の三島は、有元の指摘の通り、何らかの形で「行為」を体験し始めた渦中にあるのは確かであるが、「教育的効果」のために行われた放火は、外界にむけメッセージを発信する、いわゆる啓蒙的な目的を持った「行為」であるのだ。戦後において三島のなかで「行為」は、虚構的に構築された作品のなかで現れており、芸術家、あるいは生活者として三島が行ってきた〈行為〉とは区別される。小説家として三島が抱えている関心は「生きながら何故又いかに芸術に携わるか」(『小説家の休暇』)という問題であった。三島が、自分を売り物にして公に見られる存在としてふるまった〈行為〉は、芸術家としての自分を大衆にみせる芸術的な〈行為〉に他ならないが、その晩年に三島は、『憂国』『剣』『奔馬』の主人公たちの英雄的な行為を〈模倣〉する形で自決を遂げた。これで三島は、自分が描いた主人公のように自ら「行為」の主体になったのである。それを以て、英雄たらしとする三島の夢は叶われたといえよう。『金閣寺』で試みられた「徒爾」としての放火は、その〈前兆〉としてみることができる。

「行為の後の認識」が省略されるのは、物語の結末が「放火の後の世界」、つまり「金閣の存在しない世界」に開かれているためであろう。その時空間こそ執筆時の作者が直面している現実であるのは言うまでもない。三島があえて書かなかったのは、作品にすでに

放火の後の世界にたいする認識が込められているために他ならないだろう。

以上、『金閣寺』における「循環的な構造」を手掛かりに、放火の後の世界、に手記の書き手と執筆時の作者を共におくことで明瞭になる放火の「教育的効果」を考察した。金閣放火が戦時期の空襲の再現に読み取られる理由は、「教育的効果」というそれまでの物語の展開と連続的につながらない新しい局面に作者の〈関与〉を窺わせるためである。それは作品の表に現れない戦後批判の文脈を孕んでいる。次節では『金閣寺』において主題の重層的な造形によって見えにくくなっている戦後批判の文脈に触れてみる。それは長いあいだ持ち続けてきた主題でもある。

4. 重層化される主題—戦後批判をめぐって

三島は、朝日新聞社の通信員として外遊（昭26年12月25日～昭27年5月8日）に出る直前に「『禁色』は廿代の総決算」（『図書新聞』昭26・12）というエッセーで、自身の仕事として後に残りそうな作品にその長所も欠点もさらけ出したという点で、『仮面の告白』『愛の渇き』『禁色』を挙げている。『禁色』（1部「群像」昭26・1～10、2部「文学界」昭27・8～昭28・8）については、二つの前作とは違って「自分の中の矛盾や対立物なりの二人の「私」に対話させよう」と、またこの仕事を以て「今の二十代の仕事を総決算しよう」という意図が述べられている。三島は、その後の見込みとして「ドイツの—教養小説—のやうな行き方の流れをほくも進みたい」という抱負を書いている²⁵。『金閣寺』は、三島がトマス・マンに最も傾倒していた時期に書かれた作品として、その文体にマンを意識的に模倣した痕跡（「自己改造の試み」）が見られる。

中村光夫は『金閣寺』について、以下のように述べている。

『金閣寺』が三島氏の青春の決算であり、また戦後というひとつの時代の記念碑であることはた

しかですが、作者がここで試みて成功した「偽物の告白」あるいは自我の社会化が、日本の小説の方法の上でひとつのすぐれた達成であることは、まだ十分に理解されていません²⁶。

中村は『金閣寺』を作者の「青春の決算」、また「自我の社会化」として眺めており、「戦後」という一つの「時代の記念碑」に位置付けるなど、高く評価している。上記の引用に関して中村はこれ以上言及していないが、『金閣寺』が孕むテーマの性格をよく捉えている。『金閣寺』を三島の「青春への決別の歌」として捉えている村松剛は、「生活上の充足感が自分の青春をある距離をおいて振りかえることを、彼に可能にさせた」と述べている²⁷。それは、三島の分身として造形された溝口が「金閣」という「美」の観念の実生活に及ぼす害悪を断ち切って、人生を手に入れる表象に読み取ることができる。このような展開は『禁色』の結末とその方向性が類似している。三島は外遊のあと『禁色』の第2部の構想を変え、悠一を平凡な人生に帰らせている。『金閣寺』の溝口は放火犯人ではあるが、「生きようと」決心し、この手記を書くという前提から、一個の生活者として立ち現れる。溝口はその破滅的な行為に、教養小説の主人公に備えがちな平凡さから離れた過激さを持っているが、放火という行為によって人生に開かれる結末は、生に対する肯定的な眼差しを窺わせる。

ところで、『青の時代』と共にアプレゲール事件に材をとって書かれた『金閣寺』が、放火犯人の心理を描きながら、戦後日本に対する問題意識を打ち出している点は見逃せない。後から述べるが、『金閣寺』は「占領」以降の三島の日米関係を取り扱った作品の系譜を継いでいる。とくに「アメリカ」の表象が物語に占める比重は少ないが、日米関係にたいする執筆時の三島の問題意識が、溝口が米軍の命令に従って米軍相手の娼婦の腹を踏む行為に込められている。それは対米依存の断罪の寓意である「放火」の伏線になっている²⁸。金閣放火は「教育的効果」という意義が付与され、戦火を逃れた「金閣」の存続にアメリカの影²⁹を窺わせ、

対米依存を強めていく現状に対する作者の批判的な眼差しを窺わせている。『金閣寺』は「美へのねたみ」というテーマから出発し、物語の後半に至ってこのように主題の変化が遂げられている。金閣を焼く意味は、田坂昂のいう「戦時における「私」の期待を裏切った金閣（美）への復讐」、または「「金閣の存在する世界」である戦後社会を終わらせようとする絶望」³⁰にみられる戦後批判とは異質である。本稿で何度も放火の「教育的効果」が顕現される、放火の後の世界に開かれる〈物語の可能性〉について言及したが、この〈未来〉に開かれる物語の「循環的な構造」は、読者を戦後日本の現状に目を向けさせようとした装置として仕組まれたにほかならない。つまり、放火の時点で「（美）への復讐」は意味を持たず、金閣を焼く行為は戦後社会を終わらせようとする意味より、現状を肯定するが故に必要とした「行為」なのである。中村光夫の指摘にもあったように『金閣寺』が「日本の小説の方法の上でひとつのすぐれた達成」である所以が、このような主題の重層的な造形にあると言っていいだろう。

金閣放火に込められた戦後批判は、数こそ少ないものの『金閣寺』にいたる長いあいだ、三島の創作の主題として持ち込まれてきたという点は注目に値する。占領体制は、昭和26年9月サンフランシスコ講和条約調印に続く、昭和27年4月対日平和条約・日米安全保障発行人により終了となった。やがて昭和29年3月日米相互防衛援助協定（MAS）調印を経、昭和35年新安保条約の調印に至る。戦後の日米関係を取り扱った三島の作品群は、このような時代の流れと共に書き続けられてきた。『真夏の死』（「新潮」昭27・10）は初めての外遊の後、お土産話を断り「純然たる日本の出来事」（『私の遍歴時代』）を執筆動機とし書かれた。物語は、二人の子供を海に一遍に亡くした母朝子が、時の流れと共に癒されその悲劇を忘却していく実態に絶望し、再び子供の死を願うという展開となっている。空襲の再現としての金閣放火がそうであるように、この偶発的な事故から一転し人為（人工）的に事故を起こそうとする転換に「循環的な構造」を

見ることができよう。人工的に造形される「事故」、または「火」を放つ「行為」に作者の問題意識が込められるのは言うまでもない。「真夏の死」という題目は敗戦の日本を象徴しており、戦後の経済的な〈安定〉と比例的に増してくる〈退屈〉の背後にある対米依存の現状が浮き彫りになっている。三島は『江口初女覚書』（「別冊文藝春秋」昭28・4）で、「占領時代は屈辱の時代である。虚偽の時代である。面従背反と、肉体的および精神的売淫と、策略と誑詐の時代である。」³¹と書き、「占領」に対する批判をそれとなく漏らしている。『鍵のかかる部屋』（「新潮」昭29・7）は、占領期に失われていく日本の自立を問い直す主題が込められているが、『江口初女覚書』とともに大衆の反応は得られなかった。

20代に書かれた『盗賊』『仮面の告白』『青の時代』『愛の渇き』のような作品群は、三島の自意識の問題を主に取り扱った作品として、『金閣寺』に見られるような戦後日本に対する意識は希薄であり、作者の内面の〈告白〉に終始している。例えば、『青の時代』（「新潮」昭25・7～12）と『鍵のかかる部屋』（「新潮」、昭29・7）は「占領」という時代背景を同じにしても、占領期に書かれた前作には「占領」に対する問題意識は見当たらない。三島の創作におけるこのような主題の変化は、井上隆史が『金閣寺』から『鏡子の家』に至る一貫した主題という「文学創作の営みそれ自体が生を否定してしまうというニヒリズムの帰趨についての探究」³²（傍点原文）とは異なる次元で『金閣寺』が成り立っていることを意味する。何より自分の内面に留まっている限り、外界に関心を積極的に向けることは難しいだろう。それはまさに、『金閣寺』の中で溝口が童貞を破って「人生」に到達する時点で、放火の動機が「美に対するねたみ」から啓蒙的な性格に代わっていく展開と重なっている。『金閣寺』は、松本徹の指摘の通り、三島が「「気質」のドラマとは別のところに、身を置いて、書いてゐた」³³ということができよう。

おわりに

以上、『金閣寺』における「循環的な構造」が孕む〈物語の可能性〉について考察した。「生きようと私は思った」という結句は、手記の執筆動機であると共に、書き終わった時点で〈未来〉に開かれる二重の意味を孕んでいる。『金閣寺』に対するこのような解釈は、「私」が行為者であると共に書き手であること、また回想の形式で語られることにその可能性が窺われる。特に、放火の際に行われた死から生への反転に、「私」の人生の〈原体験〉たる「有為子」をおくことで、その必然性を明らかにした。作品の表には現れないこの展開は、認識者になりがちな「私」の行為が「回想」や「記憶」、または「衝動の模倣」として行われる傾向によって裏付けられる。その「衝動」を支えるのが、「私」を取り巻く外界（他者）との関係にあるという点は見逃せない。

「アメリカ」の表象が物語に占める比重は少ないが、第4節で言及した柴田勝二によると、対米依存の断罪として米軍相手の娼婦の腹を踏む行為が、後の「放火」の伏線になっている。『金閣寺』は、戦争末期から朝鮮戦争に至る時代の文脈の上になりたっており、事件から約6年が過ぎた日米安保体制が固まりつつある現状に対する作者の問題意識が、放火の寓意する対米依存の「断罪」に盛り込まれている。三島は、アプレゲール事件の代表とされる金閣放火に材をとって、日米関係という別の角度からこの事件を「第二の現実」として書き上げたことができる。本稿はこの見方を

踏まえた上で、『金閣寺』における主題の変化を作品に孕まれる「循環的な構造」から読み取ることに重点を置いた。

ところで、三島の立場は外部の問題に対しあくまでも作品を以て答える〈表現者〉であって、『金閣寺』以降の作品は、固まりつつある日米関係の表象から離れ、表現の軸が〈天皇〉を中心とする〈日本〉に向けられていく。松本徹は、戦後における三島文学の成長のきっかけとしての「アメリカ」を照明している³⁴。三島が世界的な作家として知られるようになったのは、『潮騒』（新潮社、昭29・6）を初めとし『近代能楽集』（新潮社、昭31・4）など、優れた英語訳書が向うで出版されたことによる。それに合わせて三島もアメリカで講演や演劇の上演に力を入れていった。三島が『金閣寺』以降の「アメリカ」を戦時期や占領期のように敵対視していたとは思われない。繰り返して言う、『金閣寺』以来の三島の表象の軸は、日米関係から日本の有り方に旋回していくが、それはアメリカとの〈共生〉という否定しがたい現状の上で、取らざるを得ない三島の選択であったのであろう。

【凡例】本稿で三島作品の引用は、全て『決定版三島由紀夫全集』（新潮社、平12・11～平18・4）による。本文のルビは省略した。なお、本稿の中で「」は引用を、〈〉は強調のつもりで使っており、最も強調したい語句に`、を付した。

註

- 1 田中美代子の「美の変質—『金閣寺』論序説」（『日本文学研究資料新集30』有精堂、平3・5、所収）で使われた用語である。本稿では、田中のいう一人称告白体で書かれた『金閣寺』の物語の形式にみられる「循環的な構造」の他、この物語の構成要素に見られる様々な「循環的な構造」に対し、共にこの用語を使うことにする。
- 2 三島由紀夫「『金閣寺』創作ノート」（『決定版三島由紀夫全集6』新潮社、平13・5、初出、「波」昭49・1）、675頁。
- 3 三島由紀夫「私の小説の方法」（『決定版三島由紀夫全集28』新潮社、平15・3）、330頁。
- 4 構想段階で思案においていた主題は、美への嫉妬、絶対的なものへの嫉妬、相対性の波にうづもれた男、「絶対性を減らすこと」、「絶対の探求」のパロディーの順で創作ノートに記されている。

- 5 この試みを成り立たせる根拠として W・イーザーの『行為としての読書』(岩波書店、昭 10・5)を挙げることができる。イーザーによると文学作品は、テキストと読者の読書過程が相互作用を起こした結果、初めて顕在化される。その際、虚構のテキストに孕まれる「不確定性」、あるいは「空所」は読者に伝達される基本条件になっているという。本稿は、読者の読む行為の意味を積極的に活用し、作品に孕まれる「不確定性」、あるいは「空所」を作品の解釈に取り入れることに努めた。
- 6 中村光夫「『金閣寺』について」(新潮文庫『金閣寺』昭 35・8、引用は平 20・6)、367 頁。
- 7 有元伸子「『金閣寺』の一人称告白体」(『近代文学試論 27』平元・12)、38～39 頁。
- 8 稲田大貴「手記の向こう側へ—三島由紀夫『金閣寺』再論—」(『九大日文 23』平 26・3)。
- 9 『金閣寺』は物語の展開とともに主題の変化が遂げられている。物語の後半に至って放火の理由は「美」の問題から放火の「教育的効果」に移っている。ところで、放火の寸前に「徒爾であるから、私はやるべきであつた」(10 章)という名目が与えられている。「徒爾」としての「放火」と放火の啓蒙的な目的にみられる矛盾に関しては、第 3 節で述べた。そこには、「認識」が「行為」を実践させる動因にならないという三島の認識が反映されている。
- 10 田中美代子「美の変質—『金閣寺』論序説」(『日本文学研究資料新集 30』有精堂、平 3・5、所収)、152 頁。
- 11 田中美代子、前掲書「美の変質—『金閣寺』論序説」、155 頁。
- 12 田坂昂『増補三島由紀夫論』(風濤社、平 19・6)、190 頁。
- 13 柴田勝二「反転する話者—『金閣寺』の憑依」(『魅せられる精神』おうふう、平 14・11)、156～157 頁。柴田は、作者の創作方法として仕組まれた醜さの視覚化は、「(美への嫉妬)」というコードに「私」の生の軌跡を重ね合わせるためであるという。放火犯は「美に対するねたみを押えることが出来なかった」と供述したが、実際に犯人が抱いていた「ねたみ」は鹿苑寺内の権力から自身が疎外されることが原因として知られている。ところで、溝口が出奔に至るまで、この「美に対するねたみ」が物語の軸となっている。また、放火は「主職になれなければ、焼くほかなし」(『金閣寺』創作ノート『決定版 6』、697 頁)とした構想の通りに進まず、「教育的効果」という動機があてられている。
- 14 佐藤秀明「『金閣寺』観念構造の崩壊」(『相山国文学 19』平 7・3)、27 頁。
- 15 井上隆史「想像力と生—『金閣寺』論」(『三島由紀夫 虚無の光と闇』試論社、平 18・12)、77～78 頁。
- 16 大久保典夫「『金閣寺』の位相」(『三島由紀夫研究 6』鼎書房、平 20・7)、31 頁。
- 17 三島由紀夫「金閣寺」(『決定版三島由紀夫全集 6』新潮社、平 13・5)、15～16 頁。
- 18 佐藤秀明、前掲書「『金閣寺』観念構造の崩壊」、28 頁。
- 19 三島由紀夫、前掲書「金閣寺」、270 頁。
- 20 三島由紀夫、前掲書「金閣寺」、206 頁。
- 21 大久保典夫、前掲書「『金閣寺』の位相」、31 頁。
- 22 三島由紀夫、前掲書「金閣寺」、183 頁。
- 23 この場面は「『金閣寺』創作ノート」(『決定版 6』、699 頁)で、次のように記されている。「放火直前の気おくれと恐ろしい疲労。ここまで放火の観念に熱中したからは、焼かなくてもよいとまで考へる。しかしなほ自ら鼓舞して焼く。(臨済録に力づけられ)」。
- 24 有元伸子、前掲書「『金閣寺』の一人称告白体」、39～40 頁。
- 25 三島由紀夫「禁色」は廿代の総決算」(『決定版三島由紀夫全集 27』新潮社、平 15・2)、474～475 頁。
- 26 中村光夫、前掲書「『金閣寺』について」、368 頁。
- 27 村松剛『三島由紀夫の世界』(新潮社、平 3・1)、254～255 頁。
- 28 柴田勝二『三島由紀夫—作品に隠された自決への道』(祥伝社、平 24・11)、88 頁。
- 29 本文では溝口と母のあいだに交わされる次の対話にその影響を窺うことができる。「空襲で、金閣が焼けるかもしれへんで」「もうこの分で行たら、京都に空襲は金輪際あらへん。アメリカさんが遠慮するさかい。」。
- 30 田坂昂、前掲書『増補三島由紀夫論』、215 頁。
- 31 三島由紀夫「江口初女覚書」(『決定版三島由紀夫全集 18』新潮社、平 14・5)、710～711 頁。
- 32 井上隆史、前掲書『三島由紀夫 虚無の光と闇』、122 頁。
- 33 松本徹「『金閣寺』をめぐる」(『奇跡への回路—小林秀雄・坂口安吾・三島由紀夫』勉誠社、平 6・10)、216 頁。
- 34 松本徹、前掲書「三島由紀夫とアメリカ」。